TAT 反応を用いた語りの構成に関する探索的研究

三好 智子

(京都ノートルダム女子大学心理学部)

キーワード: 語りの構成、TAT、コレスポンデンス分析

An exploratory study on the structure of the narratives in TAT responses

Tomoko MIYOSHI

(Faculty of Psychology, Kyoto Notre Dame University)

Key Words: the structure of the narratives, TAT, correspondence analysis

目 的

心理面接においては、様々な内容の語りに出会うとともに、様々な語りのあり方に出会う。実のところ、語られる内容よりもむしろ、対象との距離のとり方や表現のし方といった、語りのあり方そのものに、語り手独自の体験世界やその背景にある固有の生の歴史が反映されているように感じることも少なくない。以上のような問題意識のもと、本研究では、女子大学生を対象に実施したTAT (Thematic Apperception Test) 反応をもとに、そこに現われる様々な語りを構成という観点から分類し、その特徴について分析を行うこととした。

方 法

被検者: 4年制女子大学の学生21名 (平均年齢19.9歳, Range19~22歳)。

検査用具: Harvard版TAT図版から1、9GF、11、17GF、19の5枚を使用した。

実施方法: 研究の主旨や倫理について説明し同意を得た上で、個別にTATを実施した。図版の提示順序は、図版1、9GF、11、17GF、19の順で、教示は以下の通りであった。「これから、一枚ずつ絵をお見せします。それを見て、簡単なお話をつくってください。それがどういう場面で、その前にどういうことがあって、これからどうなっていくか、ということをお話にしてみてください」。反応については、その場で内容を筆記するとともに、事前に許可を得てICレコーダーで録音した。

結果と考察

TAT反応の判定: 土井(2003)によって作成された語りの構成に関する指標22項目に、「既存のストーリーの援用」「設定の詳細化」の2項目を加えた計24項目を指標とした (Table 1)。各図版のTAT反応について、その指標が認められるか否かを判定し、認められた場合は1点、認められない場合は0点とした。判定にあたっては、全体の10%について筆者と他の1名で独立に判定したところ、92.0%の一致をみたため、残りは筆者のみで行った。最終的に、各指標について図版5枚分を合計したものを以降の分析に用いた。

Table 1 語りの構成に関する指標

1. 刺激の認知	9. 雰囲気と言及	17. 不確実反応
2. 刺激の明細化	10. 内界優位反応	18. ひとりごと
3. 一場面としてのまとまり	11. 部分固執反応	19. 突発的客観視
4. 心的内容の付与	12. 部分列挙反応	20. 時間・空間の疎隔化
5. 時間的経起の付与	13. 事実列挙反応	21. 非現実設定
6. 未来設定	14. 自己関与反応	22. 絵・写真反応
7. 主人公設定	15. 印象反応	23. 既存のストーリーの援用
8. 心情の推測	16. 不一致の言及	24. 設定の詳細化

語りの構成に関する指標間の関係: 語りの構成に関する指標24項目について、指標間の関係をとらえるために、コレスポンデンス分析を行った。各指標間の関係の「近さ」を2次元上のグラフに描いたものをFigure 1に示す。第1成分については、プラス方向には小さく、多くの指標が固まって寄与し

た一方、マイナス方向には、「部分固執反応」「ひとりごと」「部分列挙反応」の3項目が大きく寄与していた。第2成分については、「既存のストーリーの援用」「絵・写真反応」「設定の詳細化」の3項目が大きくプラス方向に、また「内界優位反応」がマイナス方向に寄与していた。

Figure 1で原点付近に付置されているのは、特に目立った特徴を示さない指標群であると考えられる。他方、原点から遠く付置されている指標群については、指標間の距離から、3つのグループに分けることができる。一つ目は「既存のストーリーの援用」「絵・写真反応」「設定の詳細化」のグループ、2つ目は「内界優位反応」、3つ目は「部分固執反応」「ひとりごと」「部分列挙反応」のグループであり、これらは、本研究の被検者における語りの構成を特徴づけるとともに、個人差を明確にする指標であると考えられる。

Figure 1 指標間の関係・コレスポンデンス分析

語りの構成に関する指標と被検者の付置の同時プロット: 語りの構成に関する指標24項目の布置に、被検者の布置を同時プロットしたところ、被検者の多くが原点付近に付置されたが、各1~2名については、上記3グループ近くに付置されていた。上記3グループに示される語りの構成のあり様は、少数の被検者の特徴が大きく反映された結果であることが考えられるとともに、これについては、本研究の被検者が一般の大学生であることも関係していると考えられる。上記少数の被検者についての詳細な検討や、臨床群に関する検討が、今後の課題である。

引用文献

土井真由子(2003). アトピー性皮膚炎患者のTAT反応をもとにした語りの構成に関する一研究. 心理臨床学研究, 20(6), 533-545.